

- ▷石川郎女
- ▷大伴宿禰田主
- ▷田主の従人
- ▷大津皇子の霊

大伴田主は字を仲郎といへり。  
容姿佳艶しく風流秀絶れたり。見る人聞く者の歎息せざるはなし。  
時に石川郎女と言へるもの有り。自らともにすむの感をなして、恒に独守の難きを  
悲しび、意に書を寄せむと欲して未だ良信に逢はざりき。ここに方便を作して賤しき  
姫に似せて己なべを提げて寝の側に到りて、きょうおんてきそくして、戸を叩き  
はかりていはく、「東の隣の貧しき女、将に火を取らむと来れり」といへり。  
ここに仲郎暗き裏に冒隠の形を識らず。慮の外に狗接の計りごとに堪へず。  
念ひのまにまに火を取り、路に就きて帰り去なしめき。  
明けて後、女郎すでに自媒のはづべきを恥ぢ、また心の契りの果たさざるを恨みき。  
因りてこの歌を作りてたは戯を贈りぬ。

『田主様ったら、本当にいけすかない。  
私の気持ちに気づいておられるはずなのに、  
いつもそっけない態度。  
何としてでも今宵こそ。  
こちらには秘策があるのですから・・・・・・』

家族が寝静まるのを見計らい、そそと出掛ける石川郎女。  
貧しい老婆の格好をし、手には鍋。  
田主の寝所へなんとかたどり着く。

郎女「ごめんくださいまし」

田主従人「こんな夜に何事でございますよう」

郎女「私は、東隣の貧しい女でございます。火をお借りしたいのです。」

従人「(はて、東隣に老婆が住んでるとは初耳じゃ・・・)

さては、あの声。声色をうっているが、石川郎女殿ではございませぬか。  
なぜゆえに、このような事を。

田主様、お通し致しましょうか、いかが致しましょう」

田主「郎女殿か。おもしろき事を。少し様子を見ようではないか。

ここは私に任せてくれよう」

田主「こんな夜に姫さまが、おひとりで出歩かれるとは、

何事でございますよう。さぞお困りのことでしょうか」

郎女「ええ、ええ、料理の火がないので食事の準備もできぬまま。

困って困って、恥を忍んでこちらに来たのでございます。

体も冷えて冷えて、とても寒いのです。

どうか、お家へ入れてくださいまし。」

田主「それは大変なことを、どうです？

私の従人をそちらに向かわせます。

料理がとても上手でございます、是非に手伝わせましょう」

郎女「いいえ、いいえ、めっそうもございませぬ。

それはそれは粗末な家でございます。お恥ずかしい限り。

ただ少し火をいただければ、良いのでございます。

さあ、私を貴方様の家へ入れてくださいまし」

田主「いえいえ、いかに姫さまとはいえ、

この男所帯に、あなた様おひとり招き入れるのは忍びないかと・・・」

郎女「巷の噂を聞くとよると、

貴方様は大層容姿のきらめかしい風流なお方と。

どうか、この賤しき老婆の冥土の土産、

そのお姿、拝ませてはいただけませぬでしょうか。

さあ、家に入れてくださいまし」

田主「私が風流とな。それはありがたいお言葉。  
ならばいっそう、あなた様をお通しするわけには参りませぬ。  
それが真の風流士でございましょうものを」

やりとりに痺れを切らした石川郎女。  
とうとう扉を無理くりにかじ開けて  
頭に被った布を剥ぎ取り、素顔を見せる。

郎女「もう、一体いつまでこの茶番をお続けになるのでしょうか！  
意地悪をして、この私をからかうなんて。なんてお方。  
大層、風流なお方と私は聞いておりましたのに、  
引き止めもしないで私を帰そうとする。  
本当にのろまな「みやびお」ですこと。」

～遊士と我は聞けるを屋戸貸さずわれを還せりおその風流士～

田主「はてさて、からかっておられるのは、どちらでしょう。  
あなたのような、若き女性を引き入れたりしないで、帰そうとする私こそ  
真の「みやびお」でございましょうものを。

～遊士に我はありけり屋戸貸さず還士われそ風流士にはある～

郎女「あなた様が、こんなにも意地悪なお方だったなんて。  
見損ないましたわ。もう二度とそのお顔も見たくはございません。  
頼りないお方。本当に噂通りでしたわ。  
葦の芽のようになよなよと足を引きずってらしたあなた、ご養生なさいな。

～わが聞きし耳に好く似る葦のうれの<sup>あし</sup>足痛くわが背勤めたぶべし～」

田主「郎女殿。あなたは本当に面白いお方だ。私の足は葦のよう、ですか。  
それではその葦のような、脚の持ち主、<sup>あしひ</sup>足痛く私が、お教えしましょうか。

あなた様のお心が真に求める、探し人は残念ながら、ここにはおりませぬ。  
なぜならあの、あしひきの山にこそ、真のお答えがあるのでしょうかから。  
あなた様が先ほどからおっしゃる、そのお言葉に隠された真意を。  
ご自分の本当のお気持ちに。あなたは、そろそろお気づきにならねば。」

郎女「いったい何をおっしゃりたいのでしょうか」

田主「もう夜も遅い、従人を同行させましょう。あの山へおゆきなさい」

<中入り>

連れられた従人と別れ、賤しき老婆の格好のまま、あしひきの山にて佇む石川郎女。  
そこへひとり、若く美しい青年が通りがかる。

青年「そこの姫さま。

こんな夜にひとり、何をなさっておる。  
危ないではないか、さあ私と参りましょう、  
家はどこです？」

聞き覚えのある、懐かしくやさしい声。

男の姿を見た郎女が驚く。

男は、亡くなったはずの天津皇子の彷徨える魂の姿であった。

郎女、かつての想い人である。

「なぜ」

思わず声を上げそうになる郎女。

今にも駆け寄りたくなるのを抑え、

賤しい老婆姿の自分を恥じて、頭から被った布で顔をどうにか隠す。

郎女「なんとお優しい言葉を…

ですが、このような醜い老婆などお気になさらずに。  
ささ、どうぞ先へお進みくださいませし」

天津「放ってなどおけるものですか。

それにしても、先ほどから、なんとも懐かしい気持ちになるのは何故に。  
長い長い間、お聴きしたかった声が、今ここにある気がするのです。」

郎女「何を仰っているのでしょうか。このような老婆の声に覚えがあるなど  
何かの間違えでございましょう。

さあ、どうぞお先へ。」

天津「気になるのです。どうかそのお顔、あげてはいただけませぬか。

長い間、探し続けたお方、今ここにいらっしゃる気がするのです。」

郎女「いいえ。こんな醜い老婆が、あなた様のようなお美しい方の探し人など、あり得るわけがございませぬ。人違いでございましょう。ささ、早く先にお進みくださいまし」

大津「姿形が変わろうとも、その布の隙間から見える、その眼。そのお優しい瞳。覚えております。遠いその昔、この地でこの瞳と出逢うた記憶がございます。姿形が変わろうとも瞳の奥の光は、決して変わらぬもの。

……郎女殿。あなたですね。石川郎女殿」

郎女「……………。  
お気づきになってしまわれたのですね。  
このような姿をお見せして、なんとお恥ずかしいことでしょう。  
私のことなどお忘れになって。どうかどうか、先へお進みくださいませ。」

大津「構うものか。どのような姿であろうと、私の探し求めていたお方は、あなただ。」

郎女「お恥ずかしい真似を……  
こんなまでして、私はあなたの面影を探し回っていたのでしょうか。  
ただただ、あなたにお逢いしたかった。  
あなたの面影を感じたかったのです。  
似た人でも良い、この寂しさを消してくださるお方ならば。  
お逢いしとうございました。大津さま。  
ようやく、ようやく ……」

大津「ようやく逢えたのです。郎女殿…。

けれども、私はもはや、この世にいてはならぬ身。  
ようやく出逢えたそなたを、この手で抱くことは、もう叶いませぬ。  
このあしひきの山で、せめてもう一度、ひとめで良い、  
そなたに逢える事だけを祈って、ずっとこの地を彷徨っておりました。  
やっと逢えました。  
二度と、そなたをこの手で抱けぬのは寂しい事でございます。  
ですが、そのお声を聴き、そのお美しい瞳をみつめることができました。  
もう十分。いずれ出逢えるその時まで。」

郎女「いつか…もしも、いつか出逢えたとして、互いに覚えていられるのでしょうか。  
きっと寂しきことになるでしょう。  
ならば、私がこのままここに」

大津「いいえ、それはいけません。  
そなたはこの山をおりなさい。そなたの居場所へ戻りなさい。  
決して、互いを忘れることはございませぬ。  
世が変わろうとも、そなたと私の姿が変わっていようとも。  
瞳の奥の記憶が消えることは、決してございませぬ。  
この山のしづくのように、素直でお美しいあなたの瞳を目印に。  
私は、必ずや、あなた様を見つけ出します。  
どの世であろうとも、必ずや必ず…」

郎女「必ずですよ、必ず私を見つけ出してくださいね。  
どの世であろうとも、必ずや必ず…」

～あしひきの山のしづくに妹待つとわが立ち濡れし山のしづくに～

～吾を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくに成らましものを～

<関連する歌一覧>

大津皇子の石川郎女に贈れる御歌一首

あしひきの山のしづくに妹待つとわが立ち濡れし山のしづくに  
あしひきの山の雫に、妹を待つとて私は立ち続けて濡れたことだ。  
山の雫に。

巻2・107

石川郎女の和へ奉れる歌一首

吾を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくに成らましものを  
私を待つとてあなたがお濡れになったという山の雫に、私はなりたいものです。

巻2・108

大津皇子のひそかに石川郎女に婚ひし時に、津守連のその事を占へ露はすに、皇子の  
作りませる御歌一首 いまだ詳らかならず

大船の津守が占に告らむとはまさしに知りてわが二人宿し  
大船の泊（とま）る津守が占いに現すだろうことを、まさしく知りながら私は二人で  
寝たことだ。

巻2・109

日並皇子尊（草壁皇子をさす）の石川郎女に贈り賜へる御歌一首（女郎は字を大名児といへり）  
大名児が彼方野辺に刈る草の束の間もわが忘れめや

大名児が遠くの野辺で刈る草の、ほんの束の間も私は忘れるなどということが  
あるだろうか。

巻2・110

石川郎女の大伴宿禰田主に贈れる歌一首

（即ち佐保大納言大伴卿（安麻呂）の第二子、母を巨瀬朝臣といふ）

遊士みやびをとわれは聞けるを屋戸貸さずわれを還せりおその風流士みやびを  
風流なお方と私は聞いておりましたのに。引き止めもしないでお帰しになるとは。  
のろまな「みやびお」ですね。

巻2・126

大伴田主は字を仲郎なかつこといへり。

容姿佳艶しく風流秀絶れたり。見る人聞く者の歎息せざるはなし。

時に石川郎女と言へるもの有り。自らともにすむの感おもひをなして、恒に独守ひとりまもるの難きを悲しび、意に書を寄せむと欲して未だ良信よきたよりに逢はざりき。ここに方便たばかりを作して賤しき

姫かたへに似せて己なべを提げて寝やの側に到りて、きょうおんてきそくして、戸を叩きはかりていはく、「東の隣の貧しき女、将に火を取らむと来れり」といへり。

ここに仲郎暗き裏ものにかくせるに冒隠まじはりの形を識らず。慮の外に狗接の計りごとに堪へず。

念ひのまにまに火を取り、路に就きて帰り去なしめき。

明けて後、女郎すでに自媒のはづべきを恥ぢ、

また心の契りの果たさざるを恨みき。因りてこの歌を作りてたほ戯ぶれを贈りぬ。

大伴田主は呼び名を仲郎といった。容姿美しく洗練された感覚の持ち主であった。

見る者も伝え聞く者も皆感心したことである。

さて、石川郎女という女性がいた。田主に対して、いつか結婚を願うようになり

ひとり寝の続くことを悲しむのが常であった。

ひそかに便りを寄せようと思ひながら、機会に恵まれなかった。

そこで一計を案じ、賤しい老婆の姿をして自ら鍋を持って田主の寝所に近づき、

口ごもり足元をふらつかせて戸を叩いて、偽っていった。

「東隣の貧しい女ですが、火をお借りに来ました。」

この時田主は暗闇で身をやつした姿がわからず、

女郎の求婚の意図などわからなかった。だから言われぬままに火をとり

同じ道を帰らせた。翌朝、郎女は臆面もなく自らおしかけていったことを恥じ

目的を遂げなかったことを恨めしく思った。

そこでこの歌を作って、冗談をいったのだった。

大伴宿禰田主の報へ贈れる歌一首

遊士にわれはありけり屋戸貸さず還ししわれそ風流士にはある

そうだったのですね。それでは私は「みやびお」だったのですね。

引き入れたりしないで帰した私こそ「みやびお」なのです。

巻2・127

同じ石川郎女のさらに大伴田主仲郎に贈れる歌一首

わが聞きし耳に好く似る葦の売れの足痛くわが背勤めたぶべし

本当に噂通りでしたわ。葦の芽のようになよなよと足を引きずってらしたあなた、  
ご養生なさいな。

巻2・128



ご講義中、  
市瀬先生が、興味深いお話をしてくださいました。

「万葉の時代、女性から男性の家へと行くのはありえない事でしたが  
挑戦した人がいるのですよ、失敗に終わってしまいましたが・・・」

「これはおもしろい話に違いない」  
と思い、調べると  
「巻2・126 石川郎女の大伴宿禰田主に贈れる歌」と  
「巻2・127 大伴宿禰田主の報へ贈れる歌」が見つかりました。  
左注の漢文を読むと、そこにはすでに劇世界が広がっており、  
私の頭の中の舞台では、おもしろい男女二人のやりとりが始まっていました。

万葉の時代、  
男性に対して、なんと大胆でユニークな行動をとる石川郎女という女性は、  
どのような人生の背景の持ち主なのか興味を覚えました。  
調べますと、大津皇子に愛され、歌を交わす間柄だった事がわかりました。  
けれども、皇子は郎女を残し早くに亡くなってしまいます。  
※686年大津24才、謀反の疑いで捕らえられ死を賜ったとされています。  
辞世の句 巻3・416 ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りたむ

突然に大津を亡くした悲しみが、郎女を闇雲な恋にはしらせているのだとしたら…  
田主が彼女を帰そうとした理由が、その全てを物語っているのだとしたら…

単なる面白おかしいやりとりの物語だけでなく、  
その裏にある、郎女が抱える悲しみをも、描きたいと思いました。

田主と郎女の滑稽なやりとりを中心に、面白い物語にするのであれば、  
ひとつの番組として独立する「本狂言」にするのでしょうかけれども、  
郎女の心の奥底の悲しみを表現し、昇華させるためには  
能を取り入れるほかはないと思い、狂言の部分を「間<sup>あい</sup>狂言」とし、  
田主、従人、郎女を最初に登場させて、曲全体の導入の役割を果たす、  
「狂言口開（くちあけ）」の形式にいたしました。

ただ、狂言から能への場面転換のきっかけをどうしたら良いものか…  
なかなか見つからないのです。

しばらくの間、和歌たちとの睨めっこと、音読の時間を過ごしました。  
すると、歌にひとつの共通の言葉があることに気がつきました。

わが聞きし耳に好く似る<sup>あし</sup>葦の売れの<sup>あしひ</sup>足痛くわが背勤めたぶべし  
卷2・128 石川郎女

<sup>あしひ</sup>あしひきの山のしづくに妹待つとわが立ち濡れし山のしづくに  
卷2・107 大津皇子

吾を待つと君が濡れけむ<sup>あしひ</sup>あしひきの山のしづくに成らましものを  
卷2・108 石川郎女

一見128と107・108は、何も関連のない歌ですが、  
石川郎女という女性を通して、『<sup>あしひ</sup>あしひき・<sup>あしひ</sup>あしひく』という  
ひとつの共通の言葉合わせが見えました。  
山の枕詞「あしひき」の語義は足を引いてあえぎつつ登る、の意があるそうです。

田主への当て付けの悪口に使った『<sup>あし</sup>あし・<sup>あしひ</sup>あしひく』は、  
秘かに郎女が心にしまっていた、大津皇子との思い出の場所への郷愁の裏返し。  
二人は人目につかぬよう、足をひくようなけわしい山を越え逢瀬をしたのでしょうか。  
彼女の心の奥底を紐解いていき、真の想い人、大津と出逢わせることができました。  
今世では結ばれずとも、来世では必ずや、  
山の雫のように、純粹で美しい互いの瞳を目印に、出逢って欲しいと願いました。

そして、「憎いわからずや！」の役にはなりましたが、  
当時の政局全てを知った上で、野暮を言わず、  
郎女の心を救おうと試みた田主は、誠の風流士だと思います。  
彼女を見送った後…  
肩をすくめ苦笑いをしながら、家へと戻る凛々しい田主の後ろ姿が脳裏に浮かびます。  
<さすがです、風流士。>  
思わずその背中に声をかけたくなりました。